

奈良の秋祭り

— 神事と供え物 —

福井英行

奈良県では現在でも多くの神事や、その時に
出されるお供え物がある。それぞれの村に伝
わってきたものであり、特に奈良県の^{くんなか}国中とよ
ばれる大和盆地部分の狭い地域を見てもそれぞ
れに特色がある。

御所市川合の川合八幡宮では毎年10月10日
に「ひきあい餅」の儀礼が行われる。「ひきあ
い餅」とは藁を編んで作ったコグツ（写真1）
とよばれる袋の中に餅を入れて、それを取り合
うというものである。かつては16個の餅をコグ
ツに入れて取り合いをしていたが、取り出し口
の小さい所に多くの人が殺到し、けが人も出た
ことから中止されたが、昭和60年に小餅を作り
行事の後に配布するという形で復活している。



写真1 神殿前に供えられるコグツ

祭りに参加しているのは^{ぶんぜ}奉膳、^{みどろ}水泥、川合の
三つの垣内で、頭屋はそれぞれの垣内の持ち回
りで勤めている。午後8時頃、三つの垣内の一
行が垣内の名前の入った高張提灯と、ススキと
よばれる2種類の提灯（写真2）を持って神社
に集合する。このとき奉膳からは上・下の二つ
から提灯が出されるため、全部で8つの提灯が
来る。かつては到着した垣内から神社に入って
いたが、現在は鳥居前で伊勢音頭を歌いながら
待機し、水泥石川合、上奉膳、下奉膳の順番で
宮入りをする。宮入りすると、高張提灯は社殿
前に、もう一つの提灯は石段下に据えられる。



写真2 鳥居前まで来た提灯

社殿前での神事後、石段の前で男性2人が
相撲を取る。相撲は3回勝負するが、3回とも
四股を踏み両手を突き、立ちあいの呼吸があっ
た時点で両者勝ちとなり終了する。相撲が終
わると「ひきあい餅」の儀礼となり、夕方に山
車に乗せられ集落を回り、その後、神前に供え
られていたコグツを石段から下に落とす。落ち
たら下にいる人が担ぎ神前に持って上り、再び
落とす。これを4回繰り返す。その後子供たち
がコグツに付いている綱を引っ張り、境内を回
る。コグツの中の餅を奪い合うという行事はな
くなくなったが、それに代わるものとして子供たち
への餅を配布し、ごくまきが行われ終了とな
る。

五條市久留野の御霊神社の秋祭りでは宮座が
中心となって運営されている。宮座とは水利な
どの資格をもつ家、または特別な資格はないが
定員制で組織され祭りをを行う祭祀組織のことで
ある。現在、座を構成するのは63軒の氏子で、
毎年1月6日のとんどの日に座員が集まりくじ
を引き、その年の本頭屋を1軒、相頭屋を2軒
決める。本頭屋が中心となって神事を勤め、あ
との2軒は手伝いとして相頭屋となる。もし決
定後に本頭屋に不幸事があったときは、相頭屋
の一軒に代理を務めさせる。

10月1日に一日座が行われ、集落内にある御霊神社から頭屋宅に神を遷す「オワタリ」があり、このとき頭屋宅では庭先に「オオダン」と呼ばれる神を祀る施設を作る（写真3）。



写真3 頭屋宅の庭につくられたオオダン

オオダンは、周りを竹矢来で囲み、中央には竹を2本立てて芝土をマミズルと呼ばれる蔓草で巻く。手前の竹に神を迎えて来た榊を挿し、後ろの長いほうの竹に番傘を立てる。頭屋の家に神が来る1日から祭りの当日まで、頭屋は毎日お供えをするなどの世話をしなければならない。また村人がお参りに来ることもある。

10月の第3日曜日の祭り当日には、本頭屋宅の床の間では祭に使われる日の丸御幣、金幣、スコと呼ばれる底のない一升枡にワラを入れそこに鶴、亀、三日月をかたどった餅、みかん、なすを差し込んだもの（写真4）を本頭屋と相頭屋それぞれひとつずつ合計3つ作る。シャコと呼ばれる米麴等も飾られる。午後2時から頭屋宅から神社へ「オワタリ」が行われる。



写真4 餅、なす、みかんのお供え

頭屋宅から猿田彦、獅子頭、五色の絹がついた榊、金幣を持った本頭屋、日の丸御幣を持った娘、スコ、シャコ、神輿の順に本頭屋の家を



写真5 久留野のススキ

出発し、相頭屋の家を回って神社に向かい、神事をする。またここでも神社にススキとよばれる提灯が置かれる。（写真5）

檀原市^{かしわて}膳夫町の三柱神社の秋祭りでも宮座があり、かつては「御假宮」と呼ばれる久留野のオオダンのような神を祀る施設を作っていた。現在は頭屋の家そのものを「仮屋」と呼び、床の間に祀っている。ここでの神事も神を神社から頭屋宅に迎え、祀り、再び神社に送るという他の祭りとは変わらないものであるが、お供えものは「百味」^{ひゃくみ}（写真6）と呼ばれ、多くの種類の野菜、果物等を供えるという珍しいものである。これは『檀原市史』などにも載っておらず現地に行ってみてはじめて発見したものである。



写真6 百味

このような祭りの儀礼やお供えものなどを調査していると、財政的な問題や過疎などから、簡素化あるいは一部を廃止してしまっているところが非常に多くなっていることがわかる。

久留野や川合でも出ているススキと呼ばれる提灯も、五条や御所周辺では見られるが、少し北の檀原、桜井では見ることはできない。また百味と呼ばれるものも膳夫だけでなく談山神社や橋寺でも作られていることから、関連があると思われる。このような興味深いテーマがあるのに、研究されないまま儀礼そのものがなくなるかもしれないのは非常に残念である。